

藩士<sup>はんし</sup>や、早くお城に來た武士の家族を入城<sup>いりやうじやう</sup>させると、すぐうしろに敵の武士たちをみつつけて、城門<sup>じやうもん</sup>をかたく閉ざ<sup>と</sup>してしまいました。

城外では、お城にはいれなかつた人々や、安全なところを求めて逃げていこうとする人々でごつたがえていました。その人々の群<sup>む</sup>れの中に、一人の若く美しい女性<sup>じよせい</sup>がいました。それは、今、目の前で城門を閉ざすことを命じた隊長、海老名季昌<sup>えびなすえまさ</sup>の夫人<sup>ふじん</sup>、海老名リン<sup>えびな</sup>でした。烏羽<sup>とば</sup>、伏見<sup>ふしみ</sup>の戦<sup>いく</sup>さでけがをした足をひきずりながら城内にもどつて行く季昌も、自分が閉じた城門の外に、妻のリンがいるとは夢にも思いませんでした。

そのとき、二十歳のリンは、病氣の父を見舞<sup>みま</sup>うために実家<sup>じつか</sup>に帰つていたところを、早鐘<sup>はやかね</sup>の合図<sup>あひず</sup>を聞いて入城しようとしてきたのでした。